

宗教改革500年

「カトリックというのは、思想的にも儀式その他の芸術的な面においてもすばらしい伝統をもっているのですが、私ども異教徒からみれば、また十九世紀末までつづいた厳格で敬虔なプロテスタントからみると、のんきなものですね。信徒にとっては。いっさいを教会と神父様にまかせて、自分はこのんきにしていればいい、つまり信心と信仰の習慣さえあればいい、信者がいちいち神の有無とか神学的な問題にかかわってゆかず、無智な羊のままにいるほうがいい、神父さんがすべてなんとかして下さる、罪をおかせば告解をすればそれだけでいい、・・・これは、ある時代までのことですよ、いまカトリックはそうじゃありません。プロテスタントはこうはいきません。・・・

いまは昔の話ですが、プロテスタントからカトリックをみれば、おなじ人間かとおもえるほどにちがっている時代がありました。ある時代まで、カトリックにおける人間は、教会がつくった見えざる柵のなかにいる羊だったでしょう。村の教会の神父さんは、村人のくらしのすみずみまで面倒を見たものでした。村人は農業や牧畜といった生産的なしごとをしていればすんだのです。人間は、精神的に教会に飼われていました。ただし、これは、過去形で申しています。・・・

ローマ教会や神父さんたちを介在させずに、何の太郎兵衛という自分一個と神との関係でゆこうというのが、プロテスタントでした。プロテスタントでは、信徒自身が聖書を読みます。神父に読んでもらわなくても、自分で読みさえすればそこに神のことが書かれているのです。むろんプロテスタントにも牧師さんもいますし、教会もあります。これらはカトリックの神父や教会とちがいで、信徒の自律的な信仰の維持を介ぞえしてゆくわけです。

とにかくも、歴史的プロテスタンティズムのことをここで話しています。・・・そういうわけでありますから、プロテスタントにおける個人は、カトリック時代の十倍、百倍も重くなるという言い方もできたでしょう。重くなるというのは自分自身がこの地上に存在することの責任と努力の量がずっしりと重くなることでした。しかも、独りでいても、神との関係はたえまなくある。神はじっと見ている。神はのがれようもなく一個人と関係がある。」

司馬遼太郎「明治という国家」（日本放送出版協会）181頁～183頁

「ルターは、人間の外面的なわざではなく、キリストの贖罪のわざに示された神の恵みとあわれみを全面的に受け取る「信仰のみ」において人は救いにいたるという「福音主義」を唱えました。この福音主義は、その源泉と正統性を「神の言葉」である「聖書のみ」に求めます。そこから教皇の権威や教会の伝承、ローマ教会の既存の組織、教会秩序への改革が訴えられます。」

カトリック中央協議会「ローマ・カトリックと宗教改革500年」6頁